Osaka University Knowledge Archive

Title	武田五一の建築意匠論とその思想的影響について
Author(s)	市川, 秀和
Citation	デザイン理論. 2013, 61, p. 138-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53378
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

武田五一の建築意匠論とその思想的影響について

市川秀和／福井工業大学

１．はじめに

本発表での武田五一「建築意匠論」とは，その初期論考の「茶室の沿革」（M30）や「建築の格好について」（M33）に始まり，京都高等工芸学校での実践教育を経て，京都帝国大学建築学科創設後，元良勲との共著『意匠及装飾論』（T14），さらに晩年の集大成『建築装飾及意匠の理論並沿革』（Ｓ７）へ至る，おおよそ30年間の思想形成の全体を指す。なお今回は，これまで積極的に取り上げられることの少なかった京都帝国大学着任以後を中心に考察するが，図案学や建築作品（実践と理論）との関わりは敢えて触れない。

そこで以下に，武田の建築意匠論を簡潔に紹介してから，そのダイレクトな思想的影響の具体例として，建築界の森田慶一と造園界の江山正美を取り上げたい。

２．武田五一の建築意匠論と京都帝国大学

明治30年に武田は，茶室建築に見る自由な造形美をテーマとした卒論を通して，我が国の様式建築を批判すると同時に，欧州での最新の造形意匠に見る歴史や理論を尊重した確たる創造性・制作理念に注目した。そして大学院では，東西世界に通底した造形原理のプロポーション（格好）研究に着手し，全体と部分の比例，形態と色彩の関係に拠る主知主義的な造形思考を幾何学的論理的手法から究明しようと試みた。さらに直後の欧州留学経験を踏まえ，かかる武田の視座はいっそう確信を深め，帰国後の京都高等工芸学校ではカミソリのような先鋭で厳格な実践教育，また自らの制作活動に従事したという（上図）。

武田 五一（1872～1938）

南禅寺山門のプロポーション
武田「建築物の格好について」

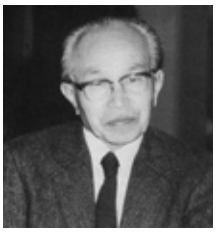
大正９年，京都帝国大学建築学科の創設を担った武田は，ここに至るまでの豊かな経験から円熟期を迎え，自らの建築意匠論を纏めようと，大正14年に門下生・元良勲の協力で『意匠及装飾論』を著した。この著作ではまず意匠と実用等の関係，造形の空間・時間的性格等の基本認識を踏まえ，本論の古典的な均斉論・構成論をめぐっては，ウィトルウィウスからルネサンスの黄金律，日本の社寺建築など幅広く取り上げ，さらに最新研究のハムビッジ J.Hambidge による動的均斉論（Dynamic Symmetry, 1920）のプロポーション体系に論及した。引き続いて元良の他，岡田孝男や村田治郎の協力から『建築装飾及意匠の理論並沿革』（Ｓ７）が集大成された。

従って武田の建築意匠論の骨子とは，美が偶然・主観的創造では無く，むしろ原理的かつ論理的根拠から成立しなくてはならないとの確たる認識に基づく思想であったと言える。

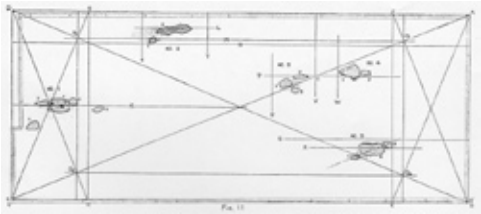
３．森田慶一と京都学派の建築論

武田の建築意匠論は，当時の関西建築界で活躍した建築家，特に安井武雄や伊藤正文らに影響を与えたことは，彼らの遺した論考から確認される。ここでは京都帝国大学の後継

森田慶一（1895～1983）



江山正美（1906～1978）



江山正美による龍安寺庭園・配石のプロポーション構成
√６矩形を使った空間分割手法（1935）

者となった森田慶一に敢えて着目したい。

大正11年に武田の招聘から京都帝国大学建築学科助教授に着任した森田慶一は，その独自な研究テーマを模索して，武田に美に関する議論を投げかけるとともに，文学部へ積極的に聴講した。かかる経緯から漸く森田が昭和７年に纏めた博士論文「ウィトルウィウスの建築論的研究」における問題視点とは，西洋古代の造形概念をめぐる美学思想史的究明であり，武田からの影響は極めて大きい。さらに森田は，武田の死去後に発表した論考「古典建築におけるシュムメトリア」(S19) にて，博士論文での射程の深化とともに，新たな考察としてハムビッジのダイナミック・シンメトリーに論及し，武田の建築意匠論の課題を森田独自に引き継いだと言えよう。

こうして森田は，武田の視座を美学・哲学的にいっそう探究して体系的「建築論」への思索を独自に切り開き，また戦後のヴァレリー芸術論から見出したギリシア古典に根ざす「全一」概念の構築を以て，所謂「京都学派の建築論」の形成が遂行されたわけである。

４．江山正美の庭園構成論とランドスケープ

武田による建築意匠論の影響は，建築界だけでなく，近代日本造園界に多大な貢献を残した意義についても触れておきたい。

明治後期の近代日本造園界では，森林や植林，公園等が経済・生産性のみならず，その歴史文化的観点からも重要視され，本多静六や田村剛，上原敬二らが森林美学や庭園文化史，自然風景論等の探究を新たに着手した。

この造園学の新動向を受けて，昭和９年に武田から直に意匠論を教示された造園学者の江山正美は，ハムビッジによるダイナミック・シンメトリーのプロポーション論を造園空間の新たな考察手法として導入し，例えば龍安寺庭園の配石構成を幾何学的・論理的に究明した（上図）。江山の視座は，庭園構成論や造園設計論などの新たなアプローチを確立し，現代ランドスケープの一基礎となった。

５．おわりに

武田の建築意匠論が持つ歴史的意義を，その影響を受けた森田や江山の事例から新たに指摘するとともに，「武田五一研究」のさらなる可能性を示唆できたものと考えている。

【主要参考文献】

1）武田五一・元良勲『意匠及装飾論』
アルス建築第講座 1925

2）武田五一『建築装飾及意匠の理論並沿革』
誠文堂・工学全集刊行会 1932

3）森田慶一『建築論』東海大学出版会 1978

4）江山正美『スケープテクチユア 明日の造園学』
鹿島出版会 1977

5）市川秀和「武田五一と京都学派の建築論」
日本建築学会近畿支部研究報告集 51号 2011

6）市川秀和「京都学派の建築論考（1）（2）」
建築史学　第54号 2010

7）市川秀和「近代日本庭園史における西洋プロポーション理論の受容について　── 江山正美の庭園構成論に関する研究（1）── 」
日本庭園学会誌 第14・15合併号 2006